

台湾茶の歴史を訪ねる 第一回



(1) 埔里の紅茶工場

須賀 努 (コラムニスト / 茶旅人)

お茶をキーワードとした旅、茶旅を始めて15年以上が経った。お茶は非常に有効なキーワードであり、単においしいお茶を求めるだけでなく、茶農家や茶園、卸市場などを訪ねることにより、その国、その地域の経済、社会、文化、歴史、生活習慣、農業政策など、様々な側面を垣間見ることができる、極めて便利な言葉だと言える。

台湾茶の歴史、という観点から見ると、外貨を獲得するための輸出の歴史という面が大きく、台湾人が高価なお茶を飲み始めたのは、ごく最近のことだ。日本統治時代も、日本人が飲むためでもなく、ましてや台湾人に飲ませるためでもない、輸出用、外貨獲得用の戦略物資として、茶は作られている。当時の総督府も茶業を奨励し、日本国内から優秀な研究者が派遣され、茶業の発展に努めている。

日本人も近年台湾好きが増えてきた。だが台湾と日本は歴史的に一体どんな繋がりがあるか、日本統治時代に日本人はこの島で何をしていたのか。我々はまだもう少しその面をよく見る必要があるように常々に感じている。今回はお茶を通して見えてきた台湾を紹介してみたい。

台湾紅茶の守護者

台湾中部の観光名所、日月潭。そのすぐ脇に猫囀山という高台がある。そこに登ると、眼下に日月潭が一望でき、何とも言えない素晴らしい風景に遭遇できる。そこには日本統治時代に建てられた茶業試験場が、今も茶業改良場魚池分場として、残されている。職員に案内してもらおうと、『もし日月潭好きの蒋介石がこの場所を知っていたなら、接収して彼の別荘にしてしまっただろう』という程の風景が広がっている。

またここには『台湾紅茶の故郷』という石碑も置かれており、日月潭と反対側を眺めると『あそこは日抛時代、渡辺さんの茶畑だった』などという言葉

が出てきて驚く。今もなお、茶畑を見ることができ、更に改良場のオフィスの裏側には、1938年に建造された古い茶工場が、現役の工場として、その優美な姿を留めている。中に入ると、下駄箱や階段の手すりに、古き良き日本を感じて、懐かしさを覚える。よくぞここまで丁寧に使い続けてくれていると、感謝したくなるほど手入れが行き届いている。



茶業改良場魚池分場 1938年に建てられた茶工場

ここは日本統治時代、紅茶製造の拠点として設けられた紅茶試験支所だったのだ。イギリスがインドやスリランカで行ってきたプランテーションと同様、日本も台湾で、外貨を獲得するために、紅茶の輸出を目論んでいた。当時、いや最近まで台湾人が紅茶を飲む姿は想像できなかった。

この改良場へ向かう坂道を車で登っていくと、途中に日本人の名前が見えたような気がして停まってもらった。そこには『故技師新井耕吉郎記念碑』と書かれた碑が建っている。新井とは一体誰なのだろうか。興味が沸いたので調べてみたことがある。新井氏は1925年に北海道帝国大学を卒業後、台湾に渡り、総督府の安平鎮茶業試験支所(いわゆる本場)に就職。茶業の品種改良などの研究で大いに貢献する傍ら、紅茶製造の適正地を探し、台湾各地を調査、

最終的に猫囃山に辿り着き、1936年に魚池紅茶試験支所を開設、その後日本人最後の支所長を務めた人物だと分かった。

新井氏が支所長に就任した頃は、既に太平洋戦争に突入しており、元々欧米へ輸出するために作られ始めた台湾産紅茶の行き場は既に無くなっていた。食糧事情が厳しき折、茶畑を野菜畑に変えろとの要請もあったようだが、折角植えた茶樹を守り抜いたという。それが彼をして『台湾紅茶の守護者』と言われる所以である。



茶業改良場魚池分場 新井耕吉郎氏胸像

終戦後、試験場は台湾政府に接收され、ほどなくして新井氏はこの魚池で病のため亡くなっている。当地の茶業関係者以外に新井という名を知る者はなく、長い間、歴代の改良場分場長が記念の石碑に拝礼するだけだったという。新井耕吉郎とは一体どんな人だったのだろうか。

当時新井氏と一緒に試験所で働いていた楊守国さん（当時90歳）を6年ほど前、訪ねたことがある。新井所長との思い出を聞くと『台湾人の若造の自分が所長と接することなど正直殆どなかった。だが見掛けるといつも厳しい顔をしていたのは思い出す。今考えてみると、茶畑を如何に守るか常に考えていたんだろう』と言い、『新井さんが亡くなった時、夜同僚が茶畑の方へ飛んでいく蛍を見かけて、「所長は今日も茶畑の見回りに行ったんだな」と言っていたのが強く印象に残っている』と話してくれた。新井氏は責任感の強い、実直な人だったと推察できる。

その楊さんは光復後も、茶業改良場で働き、台湾の紅茶品種、台茶8号の開発に関わったという。台湾の紅茶は50-60年代に輸出の最盛期を迎え、新井氏の望みは楊さんたちに受け継がれたと見てよいだろう。だがその後は輸出競争力が無くなり低迷。1999年の大地震後、街おこしの一環として、日本時代の茶樹の葉で作った紅茶と日月潭という名所の名前を組みわせて、日月潭紅茶として見事に復活した。最近の台湾の紅茶ブームを楊さんはどう見ているだろうかと尋ねたくなり、再訪しようとしたところ『残念ながら1週間前に亡くなられた』と聞き、愕然となった。台湾茶の歴史がまた1つ流れ去ってしまった。



新井氏と働いた台湾人 楊守国さん（中央）

埔里の東邦紅茶

台湾中部に埔里という街がある。一時は日本人ロングステイヤーを誘致しようとしたほど、穏やかで空気がよい、抜群の環境を持つ山に囲まれた静かな街である。山を登れば『セデック・バレ』という映画で有名になった霧社事件の霧社があり、更に登っていくと、現在の台湾高山茶の最高峰、梨山まで行ける。山と反対に行けば、魚池、日月潭と繋がり、更に凍頂烏龍茶の鹿谷、杉林溪に辿り着く。お茶好きにはたまらないロケーションにあるのが埔里である。

その埔里の街中を歩いていると、古びた門に出くわした。『東邦紅茶股份有限公司』と書かれているが、ちょっと中を覗くと、向こうに見える建物は崩れかけており、かなり前に廃業した茶工場だと思ってしまった。そのことを、台中を中心に茶学スクールを運営し

ている講茶学院の湯家鴻氏に話すと、『東邦は今でもお茶を作っているよ』と言われて、ビックリ。慌てて案内を請い、車で門を通った。その崩れかけた建物の後ろにも建物があり、そちらが茶工場になっていた。ここの3代目、郭瀚元氏に聞くと『実は1999年の地震の時、門に近い1970年代に建てた建物は壊れたが、1950年代に祖父が建てた物はビクともしなかった』との説明があり、この話を聞いて、その創業者で彼の祖父である郭少三に大いに興味を持った。



東邦紅茶3代目 郭瀚元氏（郭少三氏が建てた茶工場で）

郭家は少三氏の祖父、郭春秧が福建省で貧しい生活から立ち上がり、その後ジャワなどで成功を取め、『南洋の4大砂糖王』とも呼ばれた。香港の北角には、今で春秧街という道が残っているほど、有名だったという。台湾にも事業を拡げて、錦茂茶行を設立、台北茶商公会の設立にも寄与し、会長を務める等、茶業の発展にも尽力した人であった。士林の郭家として名を留めている。現在台北で見られる郭元益というお菓子屋さんは、その一族だと聞いている。

少三氏は11歳の時、茶行の支配人をしていた父を亡くし、13歳で叔父である郭邦光に連れられて日本へ渡った。京都三高から東京帝国大学農芸化学科に進み、1932年に台湾に戻る。台北帝国大学で山本亮教授の指導を受け、茶樹の育種、改良などを学んでいたが、当時の総督府の茶業奨励策を見て、自ら茶業に乗り出す決意を固める。

それまで日本が台湾に持ち込んだアッサム種とは違う品種を求めて、1933年に単身タイのチェンマイ

へ行き、そこから山中に分け入るも、病に罹り、一時帰国。しかし再度挑戦して、山中放浪1か月を経て、ついに紅茶製造に適した品種、シャン種を発見し、台湾に持ち帰った。シャン種とはアッサム種の亜種と思われるが、台湾では独自の品種として分類されている。そして紅茶生産の最適地を探し、埔里に辿り着く。埔里郊外に土地を確保して、茶樹を植えた。埔里の街中に念願の茶工場を建造したのは1939年、本格的な茶生産に入る。



郭少三氏が発見したシャン種

1935年当時、魚池で紅茶を製造していたのは、日本資本の3社のみ。東邦紅茶はこの地区では台湾資本初の紅茶会社であった。その後総督府の奨励策により、1940年には合計11社が投資認可されているが、台湾資本はやはり東邦だけであった。因みに日本の投資者の中には東急の五島慶太の名前もあり、その当時台湾における紅茶製造に大きなビジネスチャンスがあったこととみられていたことが窺われる。

ところが時局は紅茶の輸出を止めてしまった。太平洋戦争が勃発すると、主要輸出先であったヨーロッパ、アメリカと戦闘状態になり、輸出などできるはずもなく、製茶どころか前述の新井氏が茶樹を守ることに奔走する事態となるのである。折角花開きかけた紅茶生産は一気に停滞した。

しかし戦争が終結し、日本が奨励した台湾紅茶に最盛期が訪れたのはある意味、皮肉なことである。1950-60年代、東邦紅茶も紅茶生産に邁進したが、その後は徐々に国際競争力を失い、表舞台からその姿

は消えて行った。少三氏が通風を患った1980年以降は、茶の製造を縮小、スリランカなどから輸入した紅茶を販売したり、安い茶飲料を製造してきた（因みに台湾で初めて簡易な茶飲料を発売したのは東邦と言われている）。この茶飲料は当時かなり売れ、埔里付近の人々は皆東邦紅茶の飲料を飲んだことがあるという。

そして少三氏がこの世を去った1年後、地震で工場も崩れ、既に生産は完全に止まっていた。2011年に孫で、日月潭で遊覧ボートの仕事をしていた瀚元氏が工場を継ぐこととなり、祖父が発見して育てたシャン種を使い、伝統的な東邦紅茶の再生を図っている。シャン種で作られた紅茶は渋みもなく、飲みやすく、これまで飲んだことがない独特のお茶だった。

埔里郊外、小埔社という、車で15分、海拔500mほどの高台にその茶畑はあった。そこは台湾というより、インドを想起させる茶畑。一株一株がしっかり根を張った茶樹。大きな葉はアッサム種に近く、中には80年前に植えられ、そのまま成長した喬木もいくつか見られた。『20年ほど放置したため、かなりの喬木になったが、茶摘みに不便なので、一部を切り、茶樹を低くした』そうだ。

その高い茶樹の前に立つと、少三氏の息吹、情熱が伝わってくるようで、心が沸き立つのを押さえられなかった。因みに晩年の少三氏を知る従業員にその印象を聞くと『まるで日本人のような精神を持つ、実に厳粛な人で、ちょっと怖かったよ』と笑いながら話してくれた。その姿は魚池試験場の新井氏を思い起こさせるが、2人に接点があったかどうかを知る資料はない。ただ狭い茶業界のこと、育種や品種の改良について、きっと熱い議論を日本語で交わしていたに違いない。

実はもう一つ気になっていたものがあつた。それは工場の向こうに見えた瀟洒な建物。聞いてみると『あれは宿舎だ』と言われたが、どうみてもワーカーが住むような家ではない。かなり古い建物でもある。家の中に案内されてびっくり。まるで昭和レトロな玄関、そしてピアノのある洋間、更に奥には畳の部屋まである。ここが少三夫妻の暮らした家であり、

少三氏が集めた茶や農業関係の日本語の本がそのまま残っていた。まるで郭少三が生きているかのような雰囲気がある。

てっきり今は誰も住んでいないものと思っていたが、そこへ住人が帰ってきた。その女性はハッキリとした日本語で『いらっしゃい』と言った。見るからに品の良い、この方が少三氏の奥様、郭張月雲さんであった。彼女は台北第三高女を卒業後、1938年に少三氏と結婚。とても98歳には見えない、凛としたハリが感じられた。少三氏の後、東邦紅茶を実質的に切り盛りしてきたのは、実はこのお婆様であつたらしい。



郭少三夫人 郭張月雲さんと

因みに瀚元氏と話していると『そういえば、先日お婆様を訪ねて、日本の有名な歌手の姉という人が来たよ』という。その名前を聞いてみると、何と人気歌手一青窈さんの姉、医師で作家の一青妙さんだと分かった。実は少三氏の妹、郭美錦さんが基隆の顔家という台湾の5大財閥の1つに数えられる名家に嫁いだが、その孫にあたるのが一青姉妹だという。台湾はやはり狭い、そして日本との繋がりには実に深い。



郭少三がタイから持ち帰り植えたシャン種の喬木茶樹